

経験と主観が織り成す「学びの中動態」

音楽科にて、リズムアンサンブルをつくる活動での、AさんとBさんの姿です。

Bさんは、「と・ん・か・つ！！」という言葉の「か・つ」の部分に、あえて「えっ！？」という掛け合いを入れることを提案しました。ペアのAさんは、「(均等なリズムである) 4文字の方が合わせやすいんじゃないかな……」と、少し心配します。しかしBさんは、「最後が『えっ』の方が絶対に面白いよ！」と、自分ならではの主観的なこだわり(わきおこり)を譲りませんでした。いざ、2人で口に出して合わせてみます。しかし、案の定、変則的なタイミングの「えっ！！」は難しく、Bさん自身の出す音がうまく拍に合いません。その瞬間、Bさんは、「うまくいかない、もう一回！」と言い、このあと、この2人はこの「うまくいかなさ」と時間いっぱい格闘を続けることになります。



もしこの授業の導入で、教師側が『『とん・かつ』や『と・ん・か・つ』のように、全員同じ言葉で拍の入れ方を真似してみましよう』と、最初から綺麗に収まる正解の SCRIPT を全て例示していたら、どうなっていたのかなと考えてみました。きっと、子供たちはあまり迷うことなく、正しいリズムを刻むことができたでしょう。しかしそこには、Bさんの「最後が『えっ』の方が面白い！」という内発的な情動のわきおこりも、思い通りにいかないズレに対して「もう一回！」と試行錯誤する「ゆらぎ」のプロセスも、生まれなかったかもしれません。

ともすると、「うまくリズムを刻めなかった」という状態は、従来の認知的な結果(正誤)だけを追う評価では「失敗」と捉えられてしまうかもしれません。しかし、中動的なまなざしでこの瞬間を捉え直すと、Bさんは理想の音楽と現実のズレ(ゆらぎ)に主体的に対峙し、自己調整力を働かせながら知の枠組み(具体的スキーマ)をまさに更新しようとしている「最も価値ある学びの最前線」にいたことが分かります。

同様の姿は、外国語活動においても見られました。

英語を学び始めてまだ数ヶ月の3年生にとって、「数を20まで正確に言うこと」は決して簡単なことではないでしょう。当然、スムーズに言える子もいれば、途中で詰まってしまう子もいました。しかし、子供たちの姿を見ていると、数の正確さとは全く別の次元で、学びが動いていることに気付かされます。

子供たちは、「数を正しく発音しなければならない」という目的以上に、「クラスの友達を、自分が工夫して作ったお店に招待したい！」という切実な願い(わきおこり)に突き動かされていました。たとえ20までの数がうまく言えなくても、そこで諦めるのではなく、身振り手振りを交えたり、相手の表情を見ながら数え直したりして、その場の「状況」に「埋め込まれ」ながら何とかして伝え合おうとしている姿が見られました。



本校では今年度、「経験と主観を活かす学び」を副題に掲げ、子供の内側から自然と湧き上がる「中動的な学び」のプロセスを追いかけています。授業の中で子供が自ら問いを立てる「わきおこり」、目の前の事実や他者とのズレに葛藤する「ゆらぎ」、そして自分なりの原理・原則を掴む「結実」。子供が対象に没頭し、文字通り「学びがひとりでの動き出す状態」を、私たちはどう見取り、価値付けられるのでしょうか。滋賀附属小の研究二年次は、まだ始まったばかりです。これからの研究の積み重ねがとても楽しみです。(木村 仁)